

本田由紀

「家庭教育」の隘路

子育てに強迫される母親たち

(2008 勁草書房 260P 2,000円+税)



天童睦子

若者と仕事、メリトクラシー研究など、社会学、教育社会学の分野を中心に、スマッシュヒットを続ける著者の「家庭教育」論は、現代の母親の育児・教育意識を格差と葛藤の視点から実証的に分析した、「子育ての今」に迫る書である。

「私はよい母親ではない」との「告白」から始まる本書ではあるが、子育ての当事者である母親たちの悩みに寄り添うというよりも、あくまでも冷静なデータ分析に依拠して、近年の育児・教育政策の動向や「家庭教育」強化言説が、ますます母親を葛藤に満ちた子育ての閉路に追い詰めていく負の可能性を、具体的データから浮かび上がらせる。

第一部では、著者が「家庭教育」と大きく括る問題設定の内容と、これまでの研究動向が手際よく紹介されている。日本で「家庭教育」の重要性が政策的・社会的関心の的となったのは90年代以降であり、「心の教育」の提唱、家庭教育手帳の配布、社会教育法への家庭教育の盛り込み、改正教育基本法における「父母（その他の保護者）は、子の教育について第一義的責任を有するもの……」との条文追加など、一連の政策的变化があった。著者は、「家庭教育」強調論の背後に「子どもの社会性、公德心、生活習慣等が低下しているという認識があり、それを形成する場としての家庭、親のあり方をまず正すべきとの論理構造」と、教育再生会議等の動向が端的に示す、新自由主義を補完するものとしての新保守主義イデオロギーの強化があると論じる。

また、先行研究として、世代間階層再生産、階層と子育て、親子関係、育児不安、女性のライフコース研究の5つの柱があげられているが、説得的なのは「ポスト近代型能力」の解説だろう。いわゆるメリトクラ

シー型社会から、個人の能力を全人格的要素で測る「ハイパーメリトクラシー」段階への移行は、学歴選抜の変容に対応しうる新たな「社会化」（すなわち親の家庭教育）を要請する。かつての「受験学力」的知識選抜に留まらず、子どもの意欲、対人能力、人間力といった（判断基準が不明瞭な）内面的・人格的諸特性をも、「選抜」の成否を左右する重要な要素となったことが、親自身の「家庭教育」への期待と自己圧力を増幅させる要因となっている点を著者は示唆するのである。

第二部以降では、小学生をもつ母親39人へのインタビュー調査と、既存の質問紙調査〔内閣府 2005〕を基にした1890組の若者／母親のペアデータの再分析の知見が示される。母親への聞き取りは、おそらく多忙な日常であろう著者が、よくこれだけの調査と分析の時間を捻出できた后感心させられる丹念な内容だ。母と子の日常的相互作用、教育関与などの分析から、著者がグラデーショナル格差と呼ぶ、穏やかな階層的差異が示される。ただ、主に母親の学歴階層で個々の「語り」を切る分析の手法には、抵抗を感じる読者もあるかもしれない。著者が強調するのは、大半の母親が子育てに積極的に関与し、それぞれに可能な限りの配慮や努力をそれぞれに注いでいる点である。

質問紙調査の若者／母親のペア分析では、小学生時の子育てのあり方と、子どもの青年期時の地位、スキル、意識に及ぼす影響との関連の検証がなされ、貴重な知見に富む。高学歴層の母親の「全方位型完璧な子育て」志向、「きっちり」と「のびのび」の子育ての型などが提示されたうえで、親による「子どもの社会統制」と若者の「今」を連結した分析は、著者の本領発揮といったところだろう。

さて、本書の索引にも目次にもジェンダーの文字は出てこないのであるが、親（とくに母親）の家庭教育責任論に彩られた現実の子育ての背後に、根深いジェンダー構造も透けてみえる。とくにライフコースの語りからは、今なお女性たちが共通に抱える困難と葛藤状況、「母になること」があぶりだすジェンダー格差も読み取れるように思う。

大半の母親たちは、子どもの教育にできる限りの資源とエネルギーを注ぎ込んでおり、これ以上育児と教育の責任を家族に押し付けるな、というのが著者の主張である。いま必要なのは、親の過重負担を増やす政策ではなく負担を軽減する社会的整備であり、家族責任強化論や育児問題の家族内部化に対抗する、開かれた議論なのだ。

（てんどう・むつこ 名城大学准教授）